

## 懸賞当選作としての「パパイヤのある街」 — 『改造』懸賞創作と植民地〈文壇〉 —

和泉 司

- 第1節 「懸賞創作」と「パパイヤのある街」
- 第2節 「パパイヤのある街」の描いているもの
- 第3節 〈中央文壇〉における「パパイヤのある街」
- 第4節 読み込まれた「パパイヤのある街」
- 第5節 「パパイヤのある街」を乗り越えるために

### (要約)

「パパイヤのある街」は『改造』懸賞創作に台湾人作家のテキストとして初めて当選したものであったが、『改造』懸賞創作が一体どのようなものであったのかは今まで殆ど検討されていなかった。本稿では、『改造』懸賞創作の成立過程とその後の展開を追い、「パパイヤのある街」当選時における『改造』懸賞創作の日本帝国内での位置づけを確認し、「パパイヤのある街」のテキスト分析を通して、なぜ第九回の当選作が「パパイヤのある街」だったのか、どのような基準で選ばれ、どのように読まれたのかを分析し、「パパイヤのある街」が『改造』の編集戦略と、投稿者龍瑛宗の投稿上の「傾向と対策」とが噛み合った上で選ばれたものであるという結論を得た。そして、そのような戦略的なテキストであるが故に、龍瑛宗の作家としてのその後が、「パパイヤのある街」への評価に縛られ続けてしまったのではないかという判断から、今後の龍瑛宗と〈台湾文壇〉研究の指針を得た。

### 第1節 「懸賞創作」と「パパイヤのある街」

龍瑛宗の「パパイヤのある街」は、『改造』1937年4月号の「第九回懸賞創作発表」に入選作として発表・掲載された。この時の『改造』新聞広告を見ると<sup>1</sup>、新聞半頁大のものにひときわ大きい字体で誌名『改造』と書かれ、さらに各記事のタイトルと寄稿者名が並んでいる。その中で、「小説」は特にこの号でついに完結となった志賀直哉「暗夜行路」の名前が大々的に示されているが、「パパイヤのある街」も「(懸賞入選)」と付され、広津和郎や島木健作といった著名作家と並んでいた。

この第九回懸賞創作に入選作として発表されたのは、「パパイヤのある街」と、もう一作、渡辺渉「霧朝」<sup>2</sup>であった。そして、同時に「選外佳作」として、作者名がないまま31編の小説・戯曲(小説24・戯曲7)の題名も掲載されている。

『改造』懸賞創作は、1927年8月号において、「雑誌『改造』十周年記念懸賞創作募集」として告知され、1928年4月号で第一回の当選発表が行われた。以降、第八回(1935年)まで、年一回のペースで募集が続いていた。

しかし、その募集は、1935年の第八回の発表後は理由もないまま行われなかった。龍瑛宗が当選したのは、1936年にこれもまた理由の公表がないままに募集が発表された「第九回」の懸賞創作募集だった。

この「一年の中断」に、第八回から第九回にかけて、『改造』懸賞創作に変化、あるいは現在の視点で見れば「動揺」を見ることができる。

『改造』懸賞創作は1934年の第七回まで、募集要項に掲載している一等(1500円)と二等(750円)しか与えてこなかった。一等入選は『改造』懸賞創作の歴史の中でも二人だけ<sup>3</sup>であったが、その場合は二等当選者を複数出し、賞金を等分して授与するのが通例であった。『改造』懸賞創作の一つの「目玉」は、その純文学懸賞としては異例の高額賞金にあったことから、權威を守る意味でも、懸賞賞金に対するこだわりがあったのであろう<sup>4</sup>。

ところが、そのような「こだわり」を見せていたはずの賞が、1935年の第八回では二等一編に佳作一編となった<sup>5</sup>。今まで「選外佳作」としてしか使用してこなかった「佳作」という言葉を初めて「入選作」に対して使用したのである。このとき、佳作の賞金額がいくらであったかは不明だが<sup>6</sup>、二等賞金の750円より低いことは間違いない。つまり、第八回は、当選作のレベルと賞金総額の二つの重要な点で、低落傾向が見られたのである。

その低落傾向は、第八回がそれまでの当選発表時に必ず付されていた選評を載せていないことにも現れている。1935年4月号の「第八回懸賞創作入選発表」では、当選作と当選者氏名・略歴、選外佳作の題名のみしか示されず、選考結果理由などは一切なかったのだ。このとき、巻末の「編集だより」においてのみ、懸賞創作当選発表についての言及があり、そこには「今年は例年に比して応募作が甚だしく少なかったためか、二等一編、佳作一編といふ不作であった。懸賞創作の募集は今日誌界の流行となり、開拓の手が隅々まで行届いたためと見るべきであらうか。それにしてもこの結果は遺憾である」と述べられていた。たしかにここで述べられているとおり、当時は『改造』懸賞創作だけではなく、『中央公論』の「原稿募集」と題した懸賞募集や、改造社が1934年に創刊した文芸誌『文芸』の『改造』同様の懸賞創作募集もあった。また楊達の応募した『文学評論』の懸賞のように、小規模文芸誌も、こぞって懸賞小説を集めていた。その意味で、投稿者側の選択肢が増えていたことは確かである。しかしそうであったとしても、それまで雑誌文芸欄の中でも多くの注目を集めてきた『改造』懸賞創作としては、この状況はショックだったのではないだろうか。おそらく、この第八回の結果が、「一年の中断」につながったのだと思われる。

そして、1937年4月号にその中断を経て発表されたのが第九回の懸賞創作入選発表だったが、そこに掲載された龍瑛宗「パパイヤのある街」と渡辺渉「霧朝」は、二作とも二等にさえ届かない、「佳作推薦」というまた新たな名称の賞が与えられ、賞金金額も明記されていなかった<sup>7</sup>。そして、第八回同様に選評はなく、やはり巻末の「編集だより」に言及があるのだが、それは第八回よりもさらに説明の少ないものであった。

かねて審査中なりし懸賞創作は別項記載のごとく決定する運びとなつた。全国より寄せられた八百余編のうち、龍、渡辺両者の作品を佳作推薦として今、来月に涉つて掲載する。応募者の努力を多とし、一般の愛読を願ひたい。

当選作への評価や内容、二等すら出なかった現状についての意見もなく、「応募者の努力」を称え、読者の「愛読を願」うだけに留まった。また、「今、来月に涉つて」とあるが、結局渡辺の「霧

朝」掲載は7月号まで延期された。このように、『改造』の第九回懸賞創作では、第八回以上にその低落傾向がはっきり見えていたのであった。

「パパイヤのある街」は、『改造』懸賞創作に初めて台湾人作家が入選したテキストとして、これまで高く評価されてきた。しかし、当時の『改造』懸賞創作の状況は、殆ど考慮されていなかった。もちろん、初めて植民地台湾出身者の小説テキストが、日本帝国全域で読まれていた『改造』という大雑誌に掲載されたというのは、非常な重要なことである。しかし、これまでの「パパイヤのある街」への研究は、「植民地台湾出身者初の入選」という点への意識が強すぎ、『改造』懸賞創作という制度についてはほとんど視野に入ってこなかった。

しかし、「パパイヤのある街」が『改造』懸賞創作に入選したということを重要視し、事実上それをもって「パパイヤのある街」の評価や価値が決定づけられている以上、その『改造』及び『改造』懸賞創作という、「パパイヤのある街」の価値背景についての検証も必要となるはずである。それによって、従来の研究でも指摘されているような「パパイヤのある街」が「〈中央文壇〉では評価されながら、台湾では歓迎されなかった」という問題についても、明らかになって来るであろう。また、現在まで「パパイヤのある街」以外の龍瑛宗の小説テキストがほとんど注目されていない状況をも考え合わせる時、『改造』懸賞創作当選の影響力が過剰なまでに大きく、それが他のテキストの存在さえ霞ませてしまうほどであったことが示されている。それだけに、テキストの成立と分析を行うならば、そこに『改造』懸賞創作当選という文脈をきちんと見出していかなければならないはずだ。

龍瑛宗は1930年代の「台湾新文学運動」には参加していない。公学校卒業後に台湾商工学校という各種学校に進学した彼の学歴は日本近代学校制度の中では傍系キャリアであり、また卒業後すぐに台湾銀行に勤務を始めた彼には、同世代の東京留学生や高学歴を持つ富裕層出身の台湾人作家志望者たちが中心の文学運動に参加する余裕も意志もなかったからだ。それ故に、彼を作家たらしめたのは、ひとえに「パパイヤのある街」が『改造』懸賞創作に入選した、という点に依拠していることになる。間違いなく、「パパイヤある街」入選は、彼の人生を大きく変えているのである。

「パパイヤのある街」には、塚本照和<sup>8</sup>や羅成純<sup>9</sup>、呂正恵<sup>10</sup>、李郁蕙<sup>11</sup>などによるテキスト分析を行った先行研究がすでに存在しており、そこでは風景描写や、特に登場人物の中心である中学校卒の台湾人インテリ青年の描かれ方についての分析が中心になされている。これらの分析は「パパイヤのある街」を読む上で非常に重要であり、その点についての先行研究がこのようにそろっていることは非常に有意義なことである。

だが、これらの先行研究では、どうしても旧植民地における〈日本語文学〉テキストの意義と価値を検証する方向に向かっているため、「パパイヤのある街」の成立背景については、龍瑛宗が植民地の過酷さ・悲惨さを訴えるために描いたテキストである、という判断が前提になっている。もちろん、そのような背景が存在していたことを否定するつもりはない。だが、それだけでは、彼がこのテキストを『改造』に投稿した理由とするには十分ではないし、「パパイヤのある街」というテキストの持つ構造の背景を説明し尽くせない。1930年代の「台湾新文学運動」における台

湾人作家志望者たちの文学懸賞への欲望は、〈台湾文壇〉の確立という大文字の目的の背後に、彼らの個人的成功を望む意志があった<sup>12</sup>。龍瑛宗にもそれと同様な背景を想像することは可能であるし、そうであるとき、実際に『改造』懸賞創作に当選した唯一の台湾人作家とその当選テキストを、『改造』懸賞創作という文脈から読み直すことは非常に重要になるはずである。

## 第2節 「パパイヤのある街」の描いているもの

では、「パパイヤのある街」には具体的には何が描かれており、そのテキスト内容にはどのような背景が推測できるのであろうか。テキストに沿って見ていこう。

### 1. 舞台である「街」と「台湾」

「パパイヤのある街」は『改造』1937年4月号の文芸欄冒頭に掲載された。全58頁で、14の節に分かれている。テキスト内の時間は冒頭が九月末、そこから季節の移ろいを示し、秋、冬、正月、二月、六月末、真夏、と時間が過ぎ、最終的に翌年の「十一月末」で終わる<sup>13</sup>。主人公の陳有三は、「優秀なる成績でT市の中学校を卒業」し、ある「街」の街役場に「雇」として就職した二十歳の台湾人青年である。陳有三が「九月末」に街役場勤務のため、「街」へやってきたところから、物語が進められる。

この「街」で、陳有三は友人で製糖会社勤務の洪天送、「某役所」に勤め、5人の子供を抱え生活に苦しんでいる蘇徳芳、役場の同僚である戴秋湖と雷徳、中学時代の同級生の廖清炎らの「中学校卒」以上の学歴を持つ青年達と、「公学校卒の学歴しかない」黄助役、仕事が出来ないと周囲から軽蔑されている「たるんだ肉体の四十男」林杏南らの職場の上司・同僚達、そして林杏南の家に間借りした際に、「専検に通過」しながら「身体をすっかり壊し」たことで自宅で静養し死を待っている「林杏南の長男」や林杏南の娘である翠蛾らと出会う。陳有三は、「街役場」で働きながら「普通文官試験」「弁護士試験」合格を目指し独学を続ける生活を送るが、そのような彼の野心がこれらの人々との関わりと「街」の雰囲気、そして植民地支配下の台湾人という差別的境遇の中で変質していく様子が描かれていくのが、このテキストの流れである。

テキスト内の時期は、「林杏南の長男」が「佐藤春夫の魯迅の『故郷』」を読んだと述べている部分（佐藤春夫・増田渉共訳名義の岩波文庫『魯迅選集』の出版は1936年6月）や、陳有三の同僚・戴秋湖が私娼窟で酒を飲んだ際に歌った「流行唄」が「十九の春」（1933年）と「急げ幌馬車」（1934年）であることから、「パパイヤのある街」投稿時である1936年頃と考えていいであろう。つまりほぼ発表時と同時代の台湾を舞台としていることになる。

この陳有三がやってきた「街」は、テキスト内では明示されないが、6節目で語られる「街」の概説によって、台湾中央部の南投街であり、陳有三の卒業した中学校のあるT市は台中市であることがわかる<sup>14</sup>。テキストにあるように、陳有三のやってきた「街」は、当時で言う「理蕃」の要地であったが、その中心が「H街」（埔里街と思われる）に移ったことでさびれていた。ここには、近代的感覚でいうところの「文化」や「教養」の気配はなく、製糖会社の建物と「内地

人」向けの製糖会社社員住宅を除くと「街は穢く、くすんでゐて」、そして住民である「本島人」たちは「シユンと手鼻をかむ纏足の老女たち」や「途轍もない疳高い金属製の声で喚きちらす媼媼たち」といった、陳有三の目に「泥沼のやう」にしか映らない人々であった。

「街」の描写は、全体的に汚く澱んだものとして語られており、そこに住む人々についても同様であった。「パパイヤのある街」では、台湾の街の描写において、それを極めて不潔に、すさんだ様子に描いていた。同時に特徴的なのは「暑さ」に関する描写である。

横丁に這入ると家並が一層ごみ∨して、風雨のために剥げた土角(台湾の家屋は土をもつて造る)の壁が狭く胸に圧迫してき、細路は陽のさゝぬためらしく、じめ∨して、それが子供らのたれた糞や尿などの臭気と、蒸すような暑気とが、むん∨と立ちこめてゐた。

(略)しかしトタン屋根の吸収した熱は全身を締めつけるほど暑かった。陳有三の灼かれた褐色の顔には油汗が粘つくくぎら∨し、はだけた身体から見る∨滴るやうに大粒の汗が後から後から湧き出では流れた。

この時期までの台湾人作家志望者達のテクストを見る限り、その中に台湾の「暑さ」を描いたものはほとんど無い。日本人による「暑さ」描写の例は枚挙に暇がなく、むしろ、「暑さ」に言及していない日本人作家はほぼ皆無といってもよいだろう。だが、台湾人作家志望者達は、ことさらに台湾を「暑い」場所として描くことはなかったのである。

この「暑さ」の表現は、「パパイヤのある街」での描写がまさにそうであるように、「不潔」「怠惰」「だらしない」「思考停止」といったマイナスイメージを引きずり出している。当時は、現在の医学では否定されている「熱帯神経衰弱」という「病気」が存在していると信じられていた。これは、熱帯の「暑さ」が人間の活動を停滞させ、精神を蝕むという理解に基づいており、症例として、北方民族が熱帯に移住した際に発祥する精神的停滞が挙げられていた<sup>15</sup>。日本帝国の例でいえば、端的に言って、内地から台湾へ移住した人々が発症する病気と考えられ、同時に、その現地民である台湾人の精神活動・行動が日本人のそれに比して劣ったものであることの原因ともされていたのである。このような偏見・先入観がそのまま「台湾」に当てはめられた時、内地が求める「台湾」そして「台湾人」のイメージとして、「暑さ」＝「怠惰と停滞」が喚起されてしまうのであり、「パパイヤのある街」は、そのイメージを誘導してもいるのである。

## 2. 「台湾人インテリ青年」の位置づけ

このように、「街」の描写のみならず、そこから敷衍して「台湾」そのものを「澱み」の中にあるものと語るこのテクストの内部で、陳有三は当初の「普通文官試験」「弁護士試験」合格という目標を見失っていくことになる。「パパイヤのある街」に関する内地における同時代評をまとめ分析した王恵珍は、この過程をもって、「パパイヤのある街」を台湾人インテリ青年の苦悩を描いたもの、という把握を行っている<sup>16</sup>。

ただし、ここでは陳有三をはじめとする青年達は一方的に苦悩する立場にあるのではない。李郁蕙が詳細に分析しているように、陳有三やその他の「中学校卒」青年達は、「街」に住む「本島人」たちへの嫌悪と蔑視を隠さない。例えば、洪天送は、将来製糖会社の内地人向け社員住宅に入居することを夢見ている、それを陳有三に次のように語る。

「ここは社員の住宅です。僕はもう五カ年辛抱すればあの豚小屋みたいなところから引払って此処に住むことが出来る。しかし外の連中は可哀想に、こゝは彼らにとって、つひに「垣間見る生活」だけに過ぎないのだ。何故なら彼らは中等学校を出てゐないから。」

「社員住宅へ住めるやうになるまでには、もう五年の辛棒か。しかし隣り近所の連中の無教養には驚き入る外はないね。婚媒たちは一日ぢゆう、大声でぺちやくちや饒舌り通しだし、餓鬼どもの汚いことゝいつたら泥鼠よりひどい、亭主は亭主で白酒でも飲んだら高唱猥褻、さういふ連中と一緒に住むと僕らまでも野卑になるばかりだ。(略)」

このような観点は、陳有三にも共有されている。陳有三は、洪天送の斡旋で下宿が見つかった直後、今後の生活計画をたてる中で、彼が「来年までに普通文官試験を突破し、十カ年計画で弁護士試験を貫徹せしめやうと志を立て」た理由を挙げるが、その一つは「彼の本島人たちに対する一種の蔑み」であった。「吝嗇、無教養、低俗の汚い集団こそ彼の同族」と感じている陳有三は、「その彼らと同列に看做されることを嫌つ」ていたのである。それが、陳有三や洪天送に「浴衣」や「和服」を着させ、「日本語を常用」させること背景になっていた。それが、「彼らの同族と異つた存在にある自分を見出して一種の自慰的気持を覚え」させていたのである。

このような「パイパイのある街」に現れる青年像を、李郁蕙は次のようにまとめている。

整理していえば、以上に挙げたキャラクターたちも有形無形を問わず「街」＝台湾の外側に自らを位置し、あるいはその桎梏から脱出しようとする。なおかつ、彼らによって脱出先と設定されているのは、例外なく広義的な「内地」＝日本となっているのだ。さらには、彼らの脱出可能と自恃している理由は共通して中等学校の学歴または高度の日本語能力にほかならない、ということも見て取れよう。

たしかに、陳有三は先に引用したような箇所において、自らの学歴資本を根拠として、立身出世願望を語っているし、洪天送も同様に社員住宅入居の夢を述べている。ただ、二人以外に登場する「中学校卒」の青年達は、少なくともテキスト内部の時間においては、すでに「その桎梏から脱出しよう」とはしていないし、「脱出可能と自恃して」もない。蘇徳芳は生活苦の中ですでに将来に対し目標を抱けなくなっているし、戴秋湖は経済的な問題はないにもかかわらず、出世や栄達については関心を示さず、酒と女遊びに興じている。休暇中に台北から陳有三のもとへ訪れた廖清炎も、陳有三に対して立身出世願望の無意味さを説く。彼らは「台湾の現実」に埋もれ

ているのである。

また、陳有三と洪天送の願望も似て非なるものである。洪天送の「内地人」用社員住宅入居の夢は、彼自身が語るように、「あと五カ年」経てば叶うものであった。もちろんここには、台湾人社員を公然と差別している製糖会社の態度が現れているのだが、洪天送はその差別には注目せず、「五カ年」経てば自身が他の「本島人」たちとは区別され、「内地人」の住宅に入れるという特権性の確保にしか意識が向いていない。

つまり、このテキスト内の「インテリ青年」の中では、ただ一人、陳有三だけが「浮いて」いるのである。他の青年達が何らかの形で現状を受け入れている中で、陳有三だけが状況を飲み込めていないのだ。故に、彼は洪天送が両親の斡旋によって多額の持参金を約束してきた家の女性と結婚する際にそれを「打算的結婚」と述べたり、陳有三に縁談話を持ち込む戴秋湖親子に対して「本島人早婚の弊習を僕ら自ら、改めなければ不可ないと思ひます」と言い返すなど、「台湾における現実」を理解できていない人物として描かれていくのである。そして同時に、このテキストは、陳有三が「台湾における現実」を経験し、あきらめていく過程を描いているものでもあるのだ。

陳有三がこのように現実に対して無知な青年として描かれるのは何故だろうか。おそらくそれは、彼が「現実」を経験していく経過を描くことが、そのまま台湾に関する様々な情報を描き出すことにつながるからである。

このテキストの語り手の立場は不安定で、陳有三の内面に寄り添う部分もあれば、彼を突き放し、揶揄する語りを行う部分もある。例えば、テキスト冒頭で陳有三が案内された洪天送の部屋には、「講談雑誌が二三冊散らかつて」いるが、それ以外には柳行李と布団しかなく、板壁には「浴みする女の裸体画の口絵」が張られていると語る。陳有三についても、彼が「優秀なる成績」に自負を抱いていると述べる一方で、「彼が中学校時代に読んだ本といへば、教科書以外に修養書と偉人伝、成功立志伝位であつた。」としており、つまり彼らが自負する「教養」的背景の薄弱さを指摘している。

同じように、語り手は、陳有三が「売買婚」批判をしながら、「あはよくば内地人の娘と恋愛して結婚しよう」「結婚となると先方の養子になつた方がいゝな、戸籍上、内地人跡になれば、官庁なら六割の加棒が来るし、その他なにかにつけ、利益があるからだ」と、やはり「打算的」な結婚観を持っていることを読者に対し暴露している<sup>17</sup>。

このような語り手のあり様、そして陳有三が街役場にやってきてから徐々に「台湾の現実」を理解していくこと、そしてその「街」は汚く澱んでいて、かつ非常に「暑さ」に満ちていること<sup>18</sup>……この展開は、テキストが想定する読者に対し、台湾の情報を伝えようという姿勢から生まれているに他ならない。このテキストは、「台湾人インテリ青年の苦悩を描いている」のではなく、「台湾人インテリ青年の苦悩を揶揄的に利用して、台湾情報を伝えようとしている」のである。

### 3. 青年と流行としての「左翼思想」

それが、テキスト終盤に登場する「林杏南の長男」の表象にも現れている。この名前さえ当てられていない「林杏南の長男」と、陳有三は林杏南の家に下宿することで出会う。呉叡人が「もう一つの「閉塞時代」の精神史——龍瑛宗・台湾戦前小説にみられるコロニアルな主体の形成」において、このテキストに現れた「二つの象徴」の一つとして扱ったこの青年は<sup>19</sup>、苦学を経て、難関資格検定として当時すでに伝説的でしたらあった専門学校入学者検定<sup>20</sup>に合格したが、そのために身体を壊し進学も仕事も出来ず静養している人物として描かれていた。これだけでもわかるように、「林杏南の長男」は、苦学インテリの典型例として描かれようとしていた。そして彼が陳有三に対して語る話の内容も、その典型からまったく外れないものだった。

「パパイヤのある街」発表後のインタビューにおいて、龍瑛宗はこの「林杏南の長男」が自分がテキスト中でもっとも好きな人物である、と述べることになる<sup>21</sup>。この「林杏南の長男」の性質は、典型的な左翼青年像であり、特に目新しい人物ではない。さらにいえば、非常に現実感のない人物でもある。「林杏南の長男」は、「教科書以外に修養書と偉人伝、成功立志伝位」しか読んだことのない陳有三に対し、「雑誌はほとんど月遅れの「××」を読んでゐる。何故なら「××」は日本の現象分析は勿論、海外の思想も大いに紹介してゐるやうだ」「佐藤春夫の魯迅の「故郷」は深い感銘を受けたね。」「単行本で深い感銘を受けたのは、エンゲルスの「家族、私有財産、国家の起源」だった。」「魯迅の「阿Q正伝」やゴーリキーの作品、それにもモルガンの「古代社会の研究」なども読みたいと思つてゐる。」などと、たまたみかけるように「教養書」の名前を重ねる。この描写は、「優秀」で「教養」があると自認する陳有三を相対化し、底の浅さを露呈させているが、一方で、「××」——これは『改造』のことであろう——を読み、エンゲルスを読み、魯迅を読むという読書傾向は、左翼青年としてみれば安易な選択であるし、またそれらの感想について「深い感銘を受けた」「ぐわんとやられたね」という印象レベルの表現しかできない「林杏南の長男」も、どの程度それらの書物を消化し得たのか疑問さえ感じる。

「林杏南の長男」は、陳有三に対して資格試験勉強をあきらめるよう助言したり、「金銭はこの世で一番大切なものですぞ」と話したりする父・林杏南については一切言及しない。林杏南もまた、長男の努力と不幸を嘆きはするものの、息子の左翼思想については全く注意を払っていない。親子でありながら、この二者の間関係はテキスト内では非常に薄いのである。

それは、「林杏南の長男」が陳有三との比較のためだけに登場してくる人物だからであろう。陳有三は「遅れている台湾」の内部にあって、インテリ青年として苦悩している。しかし、その苦悩の解決のために目指すのは、台湾社会——つまり究極的には植民地統治批判と否定になるだろうが——の改善ではなく、個人の立身出世に留まり、さらに台湾人を蔑視するという肯定しがたい人物として描かれている。他の青年達は言わずもがなである。このような青年達との対比として、「林杏南の長男」は機能している。働きながら夜学に通い、苦勞して専検に合格した。そのために身体を壊し将来の夢は破れたにもかかわらず、読書を続け知識と知見を広げることを怠らない、という「林杏南の長男」像は、あまりにも典型的理想像でありすぎて、返って存在感がなく感じられてしまうが、それだけに彼の存在理由は陳有三との対比によってだけ示されるのである。



そして、彼が陳有三に投げかけた「殆ど病人とは思へない若々しい情熱」に満ちた「激しい句調」の言葉も、「陳有三にとって空々しい言葉に過ぎなかつた」、というところに、「林杏南の長男」の登場する意義が現れる。

「林杏南の長男」との会話の時点で、陳有三はすでに試験勉強を半ば放棄し、澱んだ「街」でただ日々を消化するだけの生活に対し絶望感を味わいつつあった。その中で、彼の抱いた唯一の光明は、林杏南の娘（つまり「林杏南の長男」の妹）である翠蛾の存在だった。「林杏南の長男」の言葉が「空々しく響くのみであった時、陳有三の心は、「翠蛾の美しい姿に酔ひしれてゐるだけであつた」のだ。それが、彼にとって「残された、たつた一すぢの望み」だったのである。立身出世をあきらめ、社会改革の理想論にも関心がない陳有三の心をとらえたのは「恋愛」であり、この時陳有三には観念的な理想など最早全く存在していなかったのである。

この両者の対比は、陳有三の「現実」に対する意識の変化を示し、同時にその「現実」を伴わない「林杏南の長男」の言葉の軽さも露わにってしまった<sup>22</sup>。この事態は、民族主義運動の開始とその挫折、「台湾新文学運動」の勃興と停滞、といった1920年代から1930年代にかけての台湾人青年の意識の変化と、それに食い込めなくなっている左翼思想の状況をも現している。当然ながら、このような意識変化と左翼思想の力の喪失は、内地においても同様の事態であったが、それを「パパイヤのある街」は巧に植民地台湾に置き換え、その台湾の特殊性にうまく適合させながらテキストを構成しているのである。

#### 4. 「狂気」と「死」

陳有三の翠蛾への求婚は、林杏南の「一家の犠牲となつて少しでも高く売りたい」という反対にあつて叶わなかつた。陳有三は最後の望みも絶たれ、テキスト最終盤では、「家への送金」もやめ、「ひたすらに酒に理性や感情を惑溺させ」るようになっていた。そのような彼の前に、発狂した林杏南が現れた。すでに林杏南は役場を辞め、その直後に「林杏南の長男」は死んでいた。陳有三は、その発狂した林杏南の姿を見て、彼が翠蛾への求婚が破れた後、林杏南の家での下宿を引き払う際に「林杏南の長男」から渡された手紙の内容を思い出し、「暗い洞窟のやうな心に、さつと一陣のうすら寒い風が吹きこみ、急に、わな／＼慄へてゐる自分を見出した」ところで、テキストは終わる。

許俊雅『日拠時期台湾小説研究』（文史哲出版社 1995年）の「以死亡或瘋狂為小説的叙事架構」では、「台湾新文学運動」期のテキストには、登場人物が「死亡」するか「発狂する」という場面が現れる率が非常に高いと指摘されている。

この時期（日本統治期—引用者）の小説の登場人物の「死亡」したり「発狂」したりする場面の出現率は、驚く程高い。生病老死はもとより人間の一生で必ず通るものであり、そこから逃げることは出来ない。しかし、小説の作者が「死」と「狂」等の問題を処理する時、それはただの人生現象の描写であるはずはなく、時代・社会の動静との関係があるのである。つまり、彼らはこのような悲劇をフィクションとして描くことで、伝統の陋俗や日本統治の

横暴、台湾人民に向けられた陵辱や迫害を検討したのである。作者は伝統文化を再考し、植民地統治を批判し、日本統治期に反日帝侵略・反偽礼教・反迷信という思想を主題として芸術作品として結晶し、この芸術の結晶を当時流行していた小説のフィクションとして形成したのである<sup>23</sup>。

許俊雅は、実際に登場人物が「死亡」或いは「発狂」するテキストの一覧(全41編)を付しており、「パパイヤのある街」も含まれている。つまり、許俊雅の理解からいえば、林杏南の発狂と「林杏南の長男」の死は、ともに日本統治批判の文脈から描かれたということになる。しかし、許俊雅の論の問題は、1920年代の白話文テキストから1930年代の〈日本語文学〉、さらには1940年代のテキストまでをまとめて検討している点である。この二十年に近い期間に、日本統治下の台湾では大きな社会的政治的変動を経験している。そうである以上、これらのテキストを連続性をもって把握するのは困難である。

また、「死亡」「発狂」を描くテキストは、日本統治下の台湾だけではなく、〈中央文壇〉でも頻繁に現れている。台湾などの南方に対し「熱帯神経衰弱」という「病気」の存在が押しつけられていたと述べたが、内地では、「神経衰弱」がまさに近代人・教養人が罹る「現代病」として認識されていたのがこの時代の特徴でもあった<sup>24</sup>。「死亡」「発狂」は、台湾のテキスト固有の表現ではないのである。

林杏南の発狂と「林杏南の長男」の死を考える時、日本統治との関連性は直接的なものには映らない。「林杏南の長男」は、後に陳有三が酒を飲んでいて飲み屋の「おかみさん」によれば、「長らく肺を患つてゐ」て、その死の原因はおそらくは結核であることがわかる。いうまでもなく、結核は日本では19世紀末の徳富蘆花「不如帰」に代表されるように、頻繁に文学テキストに描き込まれるようになった病気であり、またその「死病」としての性質と裏腹に、その患者に男性ならば「天才性」を、女性であれば「美人性」を見出す記号でもあった<sup>25</sup>。日本帝国においては、文学テキストに結核を描くことはすでに常套化していて、「パパイヤのある街」は文学テキストにおける「結核患者」に付与される記号性をここで「林杏南の長男」形成に利用しているのであり、その死によって悲劇性も付与しているのである。

そして、林杏南の発狂もまた同じ文脈で理解できるだろう。そもそも、「狂気」という概念自体が近代社会になって生まれたものであり、それに対応する「精神病」という「病気」が概念化されたのも近代である。つまり、台湾では日本統治によって〈植民地近代〉が訪れることで概念としての「狂気」が登場したのだ。このとき、必然的に植民地である台湾の「狂気」は〈植民地近代〉を導入した日本帝国の統治と結びつく。その意味では、たしかに林杏南の発狂は日本統治を遠因としていると言えるであろう。ただ、テキストの文脈でいうならば、街役場の仕事を蹴首されたこと、長男の死病、翠蛾の売却婚、などは、林杏南にとって十分に想像出来ていた事態であった。そしてテキスト内部には、それ以上彼の発狂の原因となる事柄は描かれていない。つまり林杏南の発狂は唐突であり、その原因が薄弱であることが否めないのである。

自棄気味な生活を送るようになっていた陳有三は、最終場面で、「発狂した林杏南」を目撃する

ことで、自分の将来にあるものも同じような「死」であると感じたのであろう。それが、彼に「暗い洞窟のやうな心に、さつと一陣のうすら寒い風が吹きこみ、急に、わな／＼ 慄へてゐる自分を見出」させたのだ。つまり、林杏南の発狂と、その直前の「林杏南の長男」の結核死は、自棄気味の陳有三の将来への不安を煽るものとして登場しているのである。そして、発狂する人物を登場させることで、「パパイヤのある街」には、「狂気」を生む心理的圧力や精神的不安が瀰漫していることを示そうとしている。何故なら、そのような心理的圧力や精神的不安は、〈近代〉こそがもたらすものであり、その存在が、テキスト内部の近代性を、逆説的に証明しうるからである。

林杏南の発狂に際して、日本統治下における差別や不当な待遇の影響は直接的には見られない。林杏南は能力が低く、周りからも軽蔑された、いつ臍首されてもおかしくない職員として描かれているが、それでも街役場の職員となっていることを考えれば——まさに、陳有三がその銚衡を突破したことを誇りにさえしていることを思い出せば——、彼は台湾社会における真に底辺に苦しむ人物ではなかった。そもそも、街役場で働いている以上、林杏南は日本語が話せるはずであり、この時点で日本語を用いる職場で働いているということ自体が、彼が一定以上の教育を受けている存在であることを証明している。だが、このテキストは、そのような林杏南の経歴については何も語らない。そのような齟齬に当たる部分は曖昧なまま、テキストは不幸の象徴として林杏南親子の姿を描いている。それは、貧窮のために娘を売り、有望な長男は死亡し、父は悲しみのあまり発狂してしまう、という、パターン化された悲劇の枠組みが持ち込まれた結果でもあるのだ。

## 5. 「パパイヤのある街」の目指したもの

このようにテキストを読む時、「パパイヤのある街」にはある戦略が見えてくる。それは、「台湾」に関する様々な事柄を、〈近代〉——それはテキスト内では、李郁蕙のいうように広義の「内地」となる——への接近を夢見る青年達の欲望の行方を通じて描き出し、そこに「挫折」「恋愛」「病気」「左翼思想」を組み込んでいく方法であり、つまりこれは、『改造』読者にいかに「読まれるか」を意識した構成となっているのだ。多くの先行研究で指摘されているように、テキスト内では台湾独自の語彙（「停子脚」や「土角」など）には、括弧が付され語彙解説がつけられていたし、テキスト内には文脈や日本語表現の検証を無視した長台詞による事項解説が、特に前半部分に頻出している。これらは全て、『改造』の読者に対する「解説」文であり、小説としての文脈を犠牲にしてでも、「パパイヤのある街」はそちらを優先しているのである。

それは、「街」の表象や台湾人青年の描き方にも現れている。前述の通り、このテキストにある「暑さ」を「台湾」の澁みや停滞、怠惰として想起させるように描くことや、青年達の利己的な志向、台湾社会への嫌悪感と蔑視、「学歴」に依存しているだけの実質的な無教養ぶりなど、テキストの全体的な雰囲気や重苦しくする描き方は、その遠慮のなさ・赤裸々さから、「台湾の実情」であると読まれやすくなり、事実同時代評ではそのような指摘から評価を受けていた。一方、このような描写は、それ以前の台湾人作家志望者達によってなされることは無かった。台湾人作家志望者達は「パパイヤのある街」のような青年像や台湾描写を描かなかった、あるいは描けなかつ

たのである。

「台湾新文学運動」に参加していた作家志望者達は、1930年代には文芸同人誌上で、〈中央文壇〉への関心を絶やさず示していたが、〈台湾文壇〉や〈台湾文化〉・〈台湾文学〉の確立と発展も同時に主張し続けていた。そのような彼らにとって、例えば『文学評論』に掲載された楊達「新聞配達夫」（1934年10月）や呂赫若「牛車」（1935年1月）のように、植民地としての「台湾」——日本の圧政に苦しむ・善良な・しかし弱い「台湾」は描けても、自ら発展性を放棄し・怠惰と無気力に沈むような・そして一方不賢くしたたかな「台湾」を描くことは憚られた。逆に、当時の龍瑛宗がそのような「台湾」像を臆面無く描けてしまったのは、彼には、少なくとも投稿時点においては台湾の文化を担うなどという考えがなかったからであろう。

しかし、「パパイヤのある街」の入選は、台湾人作家志望者達の描くような「台湾」像が、すでに〈中央文壇〉では求められていないことを顕わにした。そのギャップが、「パパイヤのある街」発表後に、〈中央文壇〉と〈台湾文壇〉との間での認識のズレと、台湾における龍瑛宗と「パパイヤのある街」評価についての長い呪縛を生んでいくのである。

### 第3節 〈中央文壇〉における「パパイヤのある街」

「パパイヤのある街」は『改造』掲載時のレイアウトから第八回までのものとは異なっている。第八回まで、テキストの最初の頁には、必ず作者の写真が掲載されていた。このルールは絶対のものだったらしく、上林暁は、『改造』懸賞創作をモチーフにした小説「懸賞作家」（『文学界』1956年4月号）の中で、第六回の二等当選者・荒木巍（テキスト中では「荒井君」）が写真掲載を拒んだことが山本実彦社長の逆鱗に触れた様子を述べている。このようにして守られてきたはずのルールが、第九回の「パパイヤのある街」では実行されていない。第九回は、「懸賞創作発表」の略歴の脇に、履歴書用と思われる小さい写真が添えてあるだけである。

そして、テキスト最初の頁には、雲海の上を飛ぶ龍のイラストが掲載されているのだが、このイラストは、第四回当選者・田郷虎雄の戯曲「戯曲 螟蛉子（国姓爺の孫）」（『改造』1934年10月号）の冒頭イラストを使い回したものであった。「戯曲 螟蛉子（国姓爺の孫）」は台湾の鄭氏政権末期を描いた戯曲なので<sup>26</sup>おそらくは台湾つながりということで使い回したのであるが、『改造』の一大イベントであるはずの懸賞創作発表でこのような杜撰な対応をしていることに、『改造』編集側の意識と、そして「パパイヤのある街」への評価も、想像できてしまうだろう。

しかし、それでもこの時期はまだ『改造』懸賞創作の〈中央文壇〉での知名度は十分に高かった。「パパイヤのある街」が掲載された『改造』が発売されると、すぐさま新聞・雑誌の文芸時評欄がこのテキストを取り上げた。

王恵珍<sup>27</sup>により、多数の「パパイヤのある街」への同時代評が発見されたことで、「パパイヤのある街」への〈中央文壇〉における評価については、非常に詳しい確認ができるようになった。ただ、王恵珍は、龍瑛宗が「パパイヤのある街」発表後に『大阪朝日新聞』台湾版でのインタビュー記事の中で語った「中等学校を出た本島人のインテリの姿をそしてその背後の社会的、経済的關係を

リアルに取扱ひたいと思ひつゝ書いたものです、封建的残滓に生き悩むインテリの生活をテーマにした」<sup>28</sup>という発言を重視し、〈中央文壇〉での同時代評が龍瑛宗の発言に沿っているかどうかを基準に分析しているため、同時代評の指摘する多くの問題点をくみ取れていない。

同時代評を分析する際に必要なのは、同時代評が「龍瑛宗の意図」に近いか遠いかではなく、なぜ、同時代評がそこに書かれているような評価を下したのかを検討し、〈中央文壇〉による「パパイヤのある街」理解がどのように形成されたかと知ることである。それによって、植民地出身者のテキストが〈中央文壇〉で発表されることの意味や影響を理解していくことを、ここでは目指すことにする。

王恵珍の前掲論文によれば、〈中央文壇〉における「パパイヤのある街」への同時代評は、14に上っている(新聞評7、雑誌評7)。『改造』懸賞創作が、この時期になってもまだかなりの注目を集めていたことが、この同時代評の数と掲載紙誌によって判断できるであろう。

それらの同時代評の多くは、王恵珍も指摘するように、テキストの日本語表現のレベルを遠回しに、あるいは直接的にも批判している。「パパイヤのある街」は日本語の文章表現レベルでも不備が多く、中でも指摘されているのが、前節でも触れた解説的な長台詞の多用である。森山啓(『都新聞』1937年4月5日)と河上徹太郎(『文学界』同年5月号)が図らずも同じ「たどたどしい」という表現で評しているように、〈中央文壇〉の読者が読む時、「パパイヤのある街」の日本語表現が未熟に映るのは避けられないことであった。ただ、ここで注意したいのは、この未熟な表現それ自体を評価する向きもあったことである。例えば名取勘助(『新潮』同年5月号)は、「あの長い会話の文章が面白い」と述べ、杉山平助(『東京朝日新聞』同年3月31日)は、「この中には、会話を利用した説明が多いが、それも、本島人の生活に興味を持つ読者なら、苦情も云はずに読み通すであらう。」としている。日本語表現の不備をマイナスにとらえようとしないのは、多くの評者に共通しているが、それは植民地出身者の日本語表現の不備を指摘することを避けているようにさえ映る。この構図は、「新聞配達夫」に対する『文学評論』の選考評にも共通している。文章のつたなさが、返ってテキストの「植民地」性を際立たせるという判断が、そこに働いているのである。この点だけからも、〈中央文壇〉の評価が、テキスト外部の条件によっている部分が多いことが、推測出来るであろう。

一方、同時代評の多くが積極的に肯定的評価を与える点は、「台湾の状況を知ることが出来た」という点にある。阿部知二などが言うように「レポル・タージュ」としてよくできている、というのである。杉山も前掲評の中で「これで本島人の生活の様相といふものが、私どもにもたいがいわかった。」と述べている。

「パパイヤのある街」は、前節で触れたように、台湾では批判され、評価が低かったが、〈中央文壇〉では好意的に受け止められた、と現在まで理解されている。しかし、「好意的」な評価が、日本語表現の未熟さは不問に付され、テキスト内容ではなく、よく知らない「台湾」についての情報を読み取ることができたから、という点に拠っているならば、それは「高評価」とは言えないのではないだろうか。そもそも、『改造』懸賞創作ほどの大規模懸賞の当選作に対し、批判が少なく好意的な評価の方が多い、というのは、環境的にいっても奇異である。新聞評も含めそれほ

どの紙幅もない同時代評では、好意的な部分ばかりが強調されていた。それは、やはり「パパイヤのある街」が日本人が描いたテキストとは違う位相で評価されていたことを示す事態でもあるだろう。

ただ、このような中でも「パパイヤのある街」へ批判的な評も存在はしていた。次にそれを見てみたい。

#### 第4節 読み込まれた「パパイヤのある街」

ここで取り上げるのは、『改造』懸賞創作の選考過程およびシステムについて批判を重ねている三輪健太郎（『改造』第九回懸賞創作発表とその推薦作品（一）『懸賞界』同年6月号）の評である。三輪の指摘は、はじめから辛辣であった。

目次には入選となつてゐるが、実は佳作推薦といふ形である。成程現文壇のレヴエルから見てたとへ二等賞としても、是を入選作として世に問ふだけの勇気を改造編集者は持たなかつたのであらう。それはいいが、四月号同誌の審査発表の頁には、その推薦に就いて何事も言つてゐない。（略）

ところが、『パパイヤのある街』は、現文壇のレヴエルから見て、ひどく見劣りもしない代りに少しも優れた作品ではない。にも不拘『改造』編集者はこの作品を推薦した。ジャーナリスチックな立場で、この作者に興味を感じたのであらうか、そればかりではないらしい。それなら、この作品の推薦は全く無意義であつたかといふに、決してさうではない。嘗ては張赫宙君を生んで我国の現代文学に一つの民族的領土を与へたやうに、龍君の出現は確にも一つの領土をわが現代文学に与へることになるであらう。改造編集者の推薦も此処に最も重点を置いたことと見るのは僻目か！それならそれで何故それを堂々とうたはなかつた！（略）

『改造』四月号の巻末によれば、応募作品は八百余編あつたといふ。その中で、たとへ現文壇のレヴエルから穎脱してゐなくても、龍君の『パパイヤのある街』は、たとへそれが三輪健太郎で、『桜のある町』であつても、渡辺君の『霧朝』と共に一番優れた作品であつたのであらう。若し私の推察にして誤りなくば、さう書いて欲しかつた。その上で龍君が台湾の本島人であつたことを考へて見たいのである。

三輪の論旨は明白である。「パパイヤのある街」は、従来ならば『改造』懸賞創作に当選するようなテキストではない。それを「佳作推薦」という形で採用したのは、かつて張赫宙をデビューさせたことで「植民地朝鮮出身作家」という新たな領域を描く作家を手に入れたやうに、今度は「植民地台湾出身作家」を獲得しようとしているだけだ、というのである。そしてそのテーマについても、次のように指摘している。

『パパイヤのある街』の内容のどこに彼の心の最も強い、鋭い、緊密な波動を送つてゐるのか。中等学校を出た若き本島人インテリの不平不満に対してであらうか。不平不満にあるとすれば、その低い経済生活に対する不満であらうか、それとも内地人に比べて不当に受けなければならない差別待遇に対する不平であらうか。暗愚な同族のマツスに対するそれであるか。或は又早婚の習俗に対する嫌悪であらうか。いづれも龍君は取上げてゐる。(略)しかし作者はその中のどれに最も強い関心を持つてゐるのか、正義感を燃やしてゐるのか、モラルを感じてゐるのか、社会批評や人生批評を与へてゐるのか、はつきりしない。

このように、三輪には、「封建的残滓に生き悩むインテリの生活をテーマにした」という王恵珍が指摘するような意味での「龍瑛宗の意図」が、見えている。しかし彼にそれは響いていない。台湾人青年の生きる悩みが日本人の読者には理解できなかったわけでないのである。だとしたら、それを積極的に評価しない原因は何か。それは、そのようなテーマが、〈日本文学〉においてすでに使い古されていたからに他ならない。明治以降の〈日本文学〉の中で、「龍瑛宗の意図」に当たるような内容は、既に繰り返し描きつくされてきたといつてもいい。そのために、多くの批評家は目新しい部分、すなわち台湾の状況観察的な部分ばかりに注目してしまったのである。

このような視点に立つ時、森山啓の批評の特徴も理解しやすい。森山は、龍瑛宗が「もつとも私が好きな」登場人物として挙げ、現在の〈台湾文学〉研究で「パパイヤのある街」において重要人物とされている「林杏南の長男」に、全く注目していない。彼が取り上げるのは、先行研究でも殆ど見過ごされてきた「林杏南」である。

ドタ靴に肘の擦り切れてゐる詰襟服を着た、しみつたれの老吏員が描かれてゐるが、七人の子女を抱へて鍼首を恐れて暮す斯ういふタイプは、われわれの所に幾らでもゐる。現に文学においても、室生犀星氏の「医王山」だとか、芹沢光治良氏の「小役人」(?)などはその種の人物を扱つてゐるやうだ。のみならず、この作品の若い吏員達にしたところで、東京などの役場や会社に勤める諸君達と比べてさへ、根本において酷似した束縛と精神を持つてゐる。いかにそれが絶望に近いものであらう。

室生犀星の「医王山」(『改造』1934年7月号)と、芹沢の「小役人」(?)——正確には「小役人の服」(『文芸』1935年2月号)——は、どちらも下級官吏の役所での厳しい待遇を描いたものである。森山は、下級官吏の悲哀という、〈台湾文学〉研究では扱われていない点に注目しているのである。インテリ青年達の「後景」に置かれていた登場人物と設定に、同時代にすでに注目があつたことは興味深い。ただ、森山が指摘するのは、日本内地と植民地との、知識人階層・俸給生活者層の近似性である。内地との近似性を見ることで、「パパイヤのある街」のリアリティを認めているのであり、植民地独特の問題点には触れていない。このような森山の姿勢を、「植民地の差別環境を無視している」と判断することもできる。内地との近似性を述べることで、植民地の問題を隠蔽することにもなるからだ。

しかし、それは「パパイヤのある街」のテキスト戦略上の問題でもある。張赫宙の『改造』懸賞創作二等当選作「餓鬼道」(『改造』1932年4月号)や、「新聞配達夫」、「牛車」がそうであったように、差別や格差の非道を訴えるならば、公務員や会社員を描くよりも、農村と農民を描いた方が直接的になることは間違いない。つまり、内地へ「植民地の差別」を訴えることに主眼に置くならば、このテキストの人物設定はうまくいかないのは当然なのである。

では、これは「パパイヤのある街」の失敗なのであろうか。そうではない。このテキストは、『改造』懸賞創作に対する、「傾向と対策」の上に創られたテキストなのである。つまり、龍瑛宗が『改造』『芸芸』をはじめとする雑誌に掲載されたテキストの傾向などから、どのような内容のテキストを改造社が求めているのか、を勘案して創られたテキストなのだ。そのことは、台北において、台湾人作家志望者とのコネクションも多かった中山侑にも見抜かれていた。中山は、『大阪朝日新聞』台湾版に寄せた「現実の問題——『パパイヤのある街』を読む」(1937年4月25日)の中で、次のように述べている。

龍瑛宗氏の「パパイヤのある街」は、私の聞いた範囲では、台湾の作家の間の批評では不評である。

「文章が下手だ」「内容もない」「描写が下手で、人物の説明も十分ではない」等々である。

(略) これは、人々がみな、周辺のおびただしい人の中から、突然名前が出た人への嫉妬と羨望であろう。(略)

この良くない批評の中、ただ一つ私も納得したものがある。それは次のものだ。

「改造社の今までの入選作品を見ると、全部題材が独特なものが採用されていることはすぐにわかる。これは台湾の特殊な風物か、あるいは生活習慣が、そういうことをよく知らない選者の興味を引いたのだろう。」

このような見方に私も同意する<sup>29</sup>。

このような点は、張赫宙が『改造』で登場したときにも言われていた<sup>30</sup>。広津和郎は「芸芸時評」(『改造』1932年5月号)で、「餓鬼道」は事実としては戦慄すべき事実が沢山並べてある。「かうした事実を読者へ訴へようといふのが目的であるやうな作では、「創作」の形式よりは、「見聞記」或は「事実報告記」の形式を取った方が(略)効果的であらうと思ふ。」と述べている。内地の評者は、植民地出身者のテキストに対しては情報源としての評価に終始し、しかし植民地出身者への「同情」からか、強い批判は行わないのだ。

『改造』懸賞創作は、特に植民地出身者には「新奇さ」を強く求めており、それは一度張赫宙で「成功」していた。そして、第八回からの低落傾向と、第九回のさらなる不調の中で、せめて次善の策として、張赫宙の「二匹目の泥鰻」をねらったのである。龍瑛宗が「佳作推薦」という不可解な賞によって登場した背景には、彼のテキストそのものへの評価の前に、このような『改造』の編集戦略上の思惑が影響していたのだ。

しかし、中山の同時代評に現れているように、そのような『改造』の選考傾向は、読者の側に



もすでに読み取られていた。そうである時、龍瑛宗はただそれに利用されたのではなく、彼もまた、そのような事情を読み取り、おそらくはそれを利用したのである。

そしてそれが、同時代評で指摘されるような、充分ではない「日本語」で表現される時、その読まれ方に「植民地への好奇の目」が先行してしまうのは避けられない。いや、むしろここでは「パパイヤのある街」が、そのような読まれ方を誘導していたと言えるだろう。その意味では、同時代評はそのようなテキストの戦略に沿っているのである。「台湾新文学運動」の参加者達が「描けない」台湾を「描く」ことで、龍瑛宗は懸賞小説の間隙を着くことができたのだ。そしてそのために、台湾内部からは、大きな批判を呼ぶことにもなったのである。

### 第5節 「パパイヤのある街」を乗り越えるために

「パパイヤのある街」は、『改造』懸賞創作の文脈に寄り添うことを目的に描かれている。テキストの最大の目的は、『改造』懸賞創作に当選することであるからだ。もちろん、それだけでテキストの意義や価値は何もない、などということはない。「餓鬼道」がそうであったように、台湾人が〈中央文壇〉にデビューする、そのこと自体が中央—植民地という非対称・不公平な関係の切り込む意味を持っているからである。

ただ、「パパイヤのある街」は、『改造』懸賞創作に当選、という目的は実質的に達成したものの、台湾では反発が巻き起こることになってしまった。〈文壇〉というものにほとんど関わりを持たなかった龍瑛宗は、文学活動の共同体に突如頭越しに侵入することになる〈懸賞作家〉という在り方への反発を想像することが出来なかったのである。

それは、当選後の龍瑛宗の「パパイヤにある街」に対する態度に現れる。先にも触れたが、龍瑛宗は、台湾内部から自身へ向けられた激しい批判に対して釈明を繰り返すことになったのだ。それがはっきり現れているのが、『台湾新文学』1937年5月号に寄せられた「若き台湾文学のために」という随筆である。

『台湾新文学』では、龍瑛宗がこの随筆を寄稿する前号に、すでに「パパイヤのある街」への批評が掲載されていた。筆名・土曜人<sup>31</sup>による「普賢」「地中海」及び「パパイヤのある街」である。「普賢」(石川淳)と「地中海」(富澤有為男)の二作は、1936年下半期の第四回芥川賞受賞作である。芥川賞受賞作の掲載が『文藝春秋』の1937年3月号・4月号で、『改造』懸賞創作の当選発表と重なっていたこともあり、『台湾新文学』はここで芥川賞と『改造』懸賞創作とを並び称していた。この批評では、「普賢」と「地中海」について、「普賢」と地中海が今度揃ひも揃つて顔を普べたことは、最も不健康な神経衰弱的文学青年層に手もなく焦点を合せたわけで、芥川賞の意義の抹殺であり甚だ遺憾である。」と酷評している。一方、「パパイヤのある街」については、次のように述べていた。

これ(「普賢」と「地中海」—引用者)に比べると、「改造」の懸賞佳作に推薦された「パパイヤのある街」は現実的であり素朴でもあるだけ少々好感もてる。しかし、歪められた

インテリ台湾人の生活を描写したこのかなりの力作は暗さを暗さとしてある程度肯定してあるやうな作者の態度、素朴の中に妙に小説的構成を意識してある点、贅し難い要素を念んである何よりも題材を透して背後に作者の眼が十分澄んでゐないことはこの新進作家のレアリスとしての今後の生長に危惧を抱かしめる。

同時に言及した「普賢」と「地中海」に比べれば好意的な評ではあるが、「パパイヤのある街」に描かれている「インテリ台湾人」の姿を「歪められた」ものととらえているところに、評者の心境が見えて来るであろう。「台湾新文学運動」に参加した台湾人作家志望者たちは、〈台湾〉を否定的に描こうとはしなかった。伝統社会や陋習を批判することはあっても、〈台湾〉自体の否定は出来なかったのだ。そして同時に、「台湾新文学運動」に参加していた台湾人作家志望者たち自身が、「パパイヤのある街」で描かれている「インテリ台湾人」を自認していたことも、このテキストでの描かれ方を「歪められた」ものであると拒否する姿勢に現れているだろう。彼らにとって、「パパイヤのある街」の描き方は、受け入れられるものではなかったのだ。

その他、台湾人資本の新聞であった『台湾新民報』や台中市発行の『台湾新聞』紙上などでも、厳しい批判があったらしい<sup>32</sup>。龍瑛宗の「若き台湾文学のために」は、そういう時期に発表され、そこでは次のように述べられていた。

疑ひもなく私自身について言へば、私は文学の垣の外に立つ人である。(略)

私は激しく知つてゐる。この台湾の悪コンディションに不拘、極めて真摯なる数多の「種蒔く人」によりて賑かな新芽が萌え出づらうとしてゐることを。(略)

私は台湾の若き作家に訴へる。諸氏が私ごときものの拙い作品を踏み越えて前進せられんことを。

諸氏にはジーニヤスがある。ターレントがある。しかも何よりも諸氏の宝石となるべき炎のやうな文学への熱意があることだ。(略)

最後に若き台湾文学に関し、楊達氏の名を逸してはならないと思ふ。(略)氏は台湾新文学の育ての親とでも言ふべきであらう。その真摯さにおいて、その忍耐において私共は感激に打たれるのである。(略)

台湾新文学史は、楊達氏をもつて、その第一頁を書き始むべきである。(略)

私は茲に氏に敬意を表し加餐自重せられ、若き台湾文学のために私どもを指導鞭撻せられんことを祈る。

冒頭から自分を徹底して卑下し、当選作も貶め、最後に楊達を称揚するこの随筆には、『改造』懸賞創作当選後に起こった台湾内部からの批判が、龍瑛宗にとっていかにショックであったかを示しているであろう。

このような事態を迎え、釈明をしていく龍瑛宗であったが、ここで彼に訪れたのは、台湾島内発行新聞における漢文欄の一斉廃止、『台湾新文学』の廃刊、そして1937年7月7日の日中戦争

開戦であった。

龍瑛宗にとっての不幸は、(作家)としての登場時期が、このような転換期と重なってしまったことにあった。彼は「パパイヤのある街」への批判に十分対応しきれず、「台湾新文学運動」に加わり、〈台湾文壇〉形成に参画することも出来なくなってしまったからだ。龍瑛宗は、〈台湾文壇〉の中で人間関係構築の機会を、ここで大きく制限されてしまうのである。

そして「パパイヤのある街」にとっても、この事態は別個の不幸であった。何故なら、「パパイヤのある街」への冷静な理解が積み重ねられる機会が失われたことで、このテキストは『改造』懸賞創作当選、という「肩書き」のみを残して忘れ去られてしまい、テキストとしての影響を殆ど与えることが出来なくなってしまったからだ。逆に言うと、『改造』懸賞創作当選という「肩書き」だけがいつまでも強烈に残り続けることとなり、結果、「パパイヤのある街」はその名前だけが繰り返し言及され、それが「作家・龍瑛宗」とほぼ同義に近いものとなってしまった。故に、龍瑛宗は、日本統治期はもちろんのこと、現在に至るまで、代表作「パパイヤある街」だけが注目されることになる。(懸賞作家)には、常に当選作が付きまとうのである。それは、「質問 一、懸賞創作の思ひ出 二、埋もれて了つた作家」(『文芸通信』1935年3月号)という当時の〈中央文壇〉作家へのアンケートの中に現れている。例えば、矢崎弾の回答を見ると、

一、これは思ひ出にあらざるも、懸賞小説募集といふことは同人雑誌もため新人の登竜門としては結構なれど、当選した新人が当選作品に縛られ、定評から伸びあがらずに苦しむ事と、当選作と落選作との懸隔のあるなしの問題は等閑に付すべきことにあらずと信ず。

とある。(懸賞作家)は、当選作に縛られる危険が当時からすでに言われていたのである。それが、日本統治期台湾では〈中央文壇〉への羨望と反発、さらに差別的環境下における不自由と束縛の中で、複雑になっていった。この後、1940年代の龍瑛宗の文学活動と成果に対し、「パパイヤのある街」を超えた、と評する者は一人も現れなかった。そして、1940年代の龍瑛宗が、西川満と『文芸台湾』に拠った事によって、評価はさらに複雑になっていくことになる。

龍瑛宗は、「邂逅」(『文芸台湾』1941年1月号)で、「パパイヤのある街」当選直後の様子を戯画化した。さらに後、「思ひ出の処女作《孤独の蠹魚》」(『興南新聞』1943年10月11日)では、「いまの私は処女作について語るのを好まない」と、語ることを拒んだ。彼は、少なくとも日本統治期の段階では、ずっと「パパイヤのある街」の呪縛を背負っていたのである。

この呪縛には、とりもなおさず、龍瑛宗のデビューが『改造』懸賞創作であったことの意味が非常に大きい。それは、(懸賞作家)に対する羨望と軽蔑とが、日本帝国内部には非常に根強かったからであり、その上に、植民地〈文壇〉における〈中央文壇〉への欲望と憧れ、反発と〈台湾文壇〉という自意識の成長が錯綜することで、龍瑛宗への評価を「パパイヤのある街」に封じ込める作用が働いたからである。

〈中央文壇〉が昭和初期から開始した純文学での懸賞は、『改造』懸賞創作から、1935年の芥川龍之介賞の登場でピークを迎える。〈台湾文壇〉という発展途上の〈文壇〉が、その展開上で求

めた〈中央文壇〉との接近は、この懸賞ブームの中で加速するが、それは彼らの意図や願いをくみ取るものではなかった。張文環、翁鬧など、『中央公論』や『文芸』の選外佳作に入った面々は、『台湾文芸』や『台湾新文学』誌上でもてはやされた。それからも、台湾人作家志望者の懸賞への想いが強さがわかる。それだけに、懸賞への熱狂と失望が、あるいは台湾唯一の当選者、龍瑛宗と「ハパイヤのある街」に投影されてしまったのかもしれない。

それは、単なる龍瑛宗と「ハパイヤのある街」の不幸に留まらない。ごく限られた、しかも差別的な意図をはらんでいる「懸賞」という機会によってしか——しかも、それを支配者の言語で表現することでしか——自己の文学活動に対する評価を求めることができない、という、植民地の文学運動の過酷な状況が、「懸賞」というシステムには内包されているのである。そして、当選した同じ被植民者の作者とテキストに対して、反発を表明しなければならない程追い込まれるような環境もそこに生じてしまうのだ。

だからこそ、植民地における「文学懸賞」を巡る問題への検討は十分な意義があり、また、今後も進めていくべき重要な課題でなのである。

---

## 注

- 1 『東京朝日新聞』1937年3月19日付紙面に掲載されたものを参照。
- 2 渡辺渉は、当選時に掲載された略歴によると、1903年生まれで茨城県の出身とあるが、その後『改造』誌上に一度も登場することがなく、どのような人物か不明である。
- 3 第一回竜胆寺雄「放浪時代」と1930年の第三回芹沢光治良「ブルジョア」の二人。
- 4 紅野謙介「懸賞小説の時代」『投機としての文学』（新曜社、2003年）によれば、明治末期には、「懸賞応募病」と称されるような懸賞投稿ブームがあり、後に作家となる人々も習作を数多く投稿していた。ただし、一方で懸賞投稿は、「賞金目当てに小説を書く」という意味で批判され軽蔑される行為でもあった。
- 5 二等当選は湯浅克衛「焰の記録」、佳作は三波利夫「ニコライエフスク」。「焰の記録」は1935年4月号、「ニコライエフスク」は同年5月号に掲載された。
- 6 第七回までは賞金額が掲載されていたが、第八回、第九回にはそれがなかった。
- 7 王恵珍「龍瑛宗「ハパイヤのある街」に対する日本文壇の評価」『野草』七十一号（2003年）は、龍瑛宗の賞金額は500円であったと述べている。それは戦後／「光復」後に龍瑛宗が語った金額と一致している。しかし、新城行弘「台北に話題を残す人々…新進小説家劉榮宗氏の巻」『台湾芸術報』（1939年1月号）の中では、龍瑛宗は賞金金額を300円と述べていた。
- 8 「台湾文学」に関するノート1 龍瑛宗の『ハパイヤのある街』『天理大学学报』（119号、1979年）。
- 9 「龍瑛宗研究」（台湾・前衛出版社『龍瑛宗集』所収。初出は『文学界』12～13号（台湾）1985年）。
- 10 「龍瑛宗小説中的知識分子形象」（台湾師範大学国文系「第二届台湾本土化学術検討会——台湾文学与社会」論文、1996年）。
- 11 「植民地の政治力学と〈場〉の表象——龍瑛宗「ハパイヤのある街」」『比較文学』（42号、1999年）。
- 12 和泉司「憧れの『中央文壇』——一九三〇年代の『台湾文壇』形成と『中央文壇』志向」『文学年報』2（2005年8月）を参照。
- 13 「ハパイヤのある街」の季節の移ろいについては、塚本前掲論文で指摘されている。
- 14 李郁蕙前掲論文では、「街」が南投街であることについて詳細な検証が行われている。
- 15 巫毓荃・鄧惠文「熱・神経衰弱与在台日本人——殖民晚期台湾的精神医学論述」『台湾社会研究季刊』54期（2004年6月）を参照。

- 16 王恵珍前掲論文を参照。
- 17 この「六割加俸」を含む植民地官僚の俸給制度については、岡本真希子『植民地官僚の政治史 朝鮮・台湾総督府と帝国日本』(三元社、2008年)の「第4章 俸給制度と民族格差」の中で詳細に論じられている。
- 18 李郁蕙は前掲論文の中で、「作中人物の語る怠惰性は往々にして「街」の気候上の特徴、すなわち「土人の文明を蝕」むような「南国」ならではの暑さと連動して語られている点は、何といても、テキストの内包する最大の限界といえよう」と指摘し、「パパイヤのある街」が描き出す「暑さ」表象の問題点を見抜いている。
- 19 『日本近代文学』第75集(2006年11月)。ここで呉が挙げた「二つの象徴」のもう一つは、「パパイヤ」で、「現実の挫折を慰撫する美の象徴」と述べている。
- 20 旧制の中学校卒業資格を認めるための資格検定。青年達にとって憧れの資格であったが、2日間で中学校9科目の試験に全て合格しなければならず、合格率は低かった。故に、専検合格は帝大に入るより難しい、などという言説も流布した。日本帝国各地で実施され、台湾でも台北市で実施された(実施日程は各道府県・植民地によって異なり、複数地区の受験も許された)。竹内洋『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』(NHKライブラリー、1997年)及び菅原亮芳「戦前日本における「専検」試験検定制度史試論——基礎的資料の整理を手がかりに」『立教大学教育学科研究年報』33号(1989年)を参照。
- 21 「台湾文学を語る“パパイヤのある街”その他」『日本学芸新聞』第35号(1937年7月10日)。
- 22 呉叡人も「林杏南の長男」の発言を「明らかに突拍子もなく、空しく、そしてばかげてさえ見える」と評しているが、同時に彼の登場を「プロレタリア文学が龍瑛宗へ与えた影響を明らかに見て取ることができる」ものとしており、時代性と齟齬をきたしていることを認めつつも、「林杏南の長男」の発言や姿勢について「龍瑛宗が描き出した台湾の近代的主体の様相である。また、これは台湾の「二重の周縁性」の完璧な象徴である」とその存在意義の重要性を強調している。
- 23 許俊雅『日拠時期台湾小説研究』の「第四章 日拠時期台湾小説創作形式之探討 第五節 以死亡或瘋狂為小説的叙事架構」。原文は中国語(和泉訳)。
- 24 現代でも、特に夏目漱石が「罹患」していた病気として、漱石と神経衰弱を巡る研究も数多い。ここでは、近森高明「二つの「時代病」神経衰弱とノイローゼの流行にみる人間観の変容」『京都社会学年報』7号(1999年)を参照した。
- 25 福田真人『結核の文化史』(名古屋大学出版会、1995年)を参照。
- 26 西川満「赤嵌記」(『文芸台湾』1940年12月号)と物語は酷似している。
- 27 王恵珍前掲論文を参照。
- 28 1937年4月6日付。この「台湾版」は現在所蔵機関がなく、2008年1月の時点で、論者は原文未見である。その中国語訳は『龍瑛宗全集』中文巻第8冊(台湾・国家台湾文学館、2006年)に所収されている。
- 29 これは、前掲龍瑛宗全集所収の中国語訳を日本語に再訳したものである。
- 30 中根隆行『“朝鮮”表象の文化誌——近代日本と他者をめぐる知の植民地化』(新曜社、2004年)を参照。
- 31 王恵珍は、前掲論文の中で、土曜人は楊達であるとしているが、『楊達全集』(中央研究院中国文哲学研究所、2001年)には土曜人名義のテキストは収録されていない。
- 32 この時期の『台湾新民報』や『台湾新聞』は散逸しており、確認することが出来ない。しかし、龍瑛宗は『日本学芸新聞』紙上で楊達と行った前掲対談記事の中で、「パパイヤのある街」への評者として「張深切、○維○(欠字—引用者)、頼明弘、頼慶」の四名の名をあげ、そのうち張深切の批評について、龍瑛宗は「感服できません」「私が台湾の人を馬鹿にしてゐると云ふが、無論あの主人公を私は或程度軽蔑してゐます。」などと反論を述べていることから、それらが批判であったことが推測できる。なお、このとき龍瑛宗は土曜人の評については「割にガイ心を衝いたやうに思ふ」と述べ、反論しなかった。